佐橋甚五郎

森鷗外

豊太閤が朝鮮を攻めてから、朝鮮と日本との間には往来が全く絶えていたのに、宗対馬守義智が徳川家の旨を承けて肝いりをして、慶長九年の暮れに、松雲孫、文※［＃「彧」の「ノ」の部分が三本、102-2］、金考舜という三人の僧が朝鮮から様子を見に来た。徳川家康は三人を紫野の大徳寺に泊まらせておいて、翌年の春秀忠といっしょに上洛した時に目見えをさせた。

中一年置いて慶長十二年四月に、朝鮮から始めての使が来た。もう家康は駿府に隠居していたので、京都に着いた使は、最初に江戸へ往けという指図を受けた。

使は閏（うるう）四月二十四日に江戸の本誓寺（ほんせいじ）に着いた。五月六日に将軍に謁見（えっけん）した。十四日に江戸を立って、十九日に興津（おきつ）の清見寺（せいけんじ）に着いた。家康は翌二十日の午（うま）の刻に使を駿府の城に召（め）した。使は一応老中本多上野介正純（ほんだこうずけのすけまさずみ）の邸（やしき）に入って、そこで衣服を改めて登城（とじょう）することになった。

　このたびの使は通政大夫呂祐吉（つうせいたゆうりょゆうきつ）、通訓大夫慶暹（つうくんたゆうけいせん）、同丁好寛（ていこうかん）の三人である。本国から乗物を三つ吊（つ）らせて来た。呂祐吉の乗物には造花を持たせた人形が座の右に据（す）えてあった。捧（ささ）げて来た朝鮮王李※（りえん）［＃「日＋鉛のつくり」、102-12］の国書は江戸へ差し出した。次は上々

官金僉知(きんせんち)、朴僉知(ぼくせんち)、喬僉知(きょうせんち)の三人で、これは長崎(ながさき)で造らせた白木の乗物に乗っていた。次は上官二十六人、中官八十四人、下官百五十四人、総人数二百六十九人であった。道中の駅々では鞍置馬(くらおきうま)百五十疋(ぴき)、小荷駄馬(こにだうま)二百余疋、人足三百余人を続(つ)ぎ立てた。

　駿府の城ではお目見えをする前に、まず献上物が広縁(ひろえん)に並(なら)べられた。人参(にんじん)六十斤(きん)、白苧布(しろあさぬの)三十疋、蜜(みつ)百斤、蜜蠟(みつろう)百斤の四色(よいろ)である。江戸の将軍家への進物(しんもつ)十一色に比べるとはるかに略儀(りゃくぎ)になっている。もとより江戸と駿府とに分けて進上するという初めからのしくみではなかったので、急に抜差(ぬきさ)しをしてととのえたも

のであろう。江戸で出した国書の別幅に十一色の目録があったが、本書とは墨色が相違していたそうである。
この日に家康は翠色の装束をして、上壇に畳を二帖敷かせた上に、暈繝の錦の茵を重ねて着座した。使は下段に進んで、二度半の拝をして、右から左へ三人並んだ。上々官金僉知、朴僉知、喬僉知の三人はいずれも広縁に並んで拝をした。ここでは別に書類を捧呈することなどはない。茶も酒も出されない。しばらくして上の使三人がまた二度半の拝をすると、上々官三人も縁でまた拝をした。上々官の拝がすんでから、上の使の三人は上々官をしたがえて退出した。

家康は六人の朝鮮人の後影を見送って、すぐに左右を顧みて言った。
「あの縁にいた三人目の男を見知ったものはないか」
側には本多正純を始めとして、十余人の近臣がいた。案内して来た宗もまだ残っていた。しかし意味ありげな大御所のことばを聞いて、皆しばらくことばを出さずにいた。ややあって宗が危ぶみながら口を開いた。
「三人目は喬僉知と申しまするもので」
家康は冷やかに一目見たきりで、目を転じて一座を見渡した。
「誰も覚えてはおらぬか。わしは六十六になるが、ま

だめったに目くらがしは食わぬ。あれは天正十一年に浜松を逐電した時二十三歳であったから、今年は四十七になっておる。太い奴、ようも朝鮮人になりすましおった。あれは佐橋甚五郎じゃぞ」

一座は互いに目を合わせたが、今度はしばらくの間誰一人ことばを出すものがなかった。本多は何か問いたげに大御所の気色を伺っていた。

家康は本多を顧みて、「もうよい、振舞いの事を頼むぞ」と言った。これは家康がこの府中の城に住むことにきめて沙汰をしたのが今年の正月二十五日で、城はまだ普請中であるので、朝鮮の使の饗応を本多が邸

ですることに言いつけておいたからである。
「一応とりただしてみることにいたしましょうか」と、本多はやはり気色を伺いながら言った。
「いや。それは知らぬと言うじゃろう。上役(うわやく)のものは全く知らぬかも知れぬ。とにかくあの者どもは早くここを立たせるがよい。土地のものと文通などをいたさせぬようにせい」
「はっ」といって本多は忙(いそ)がしげに退出した。
饗応の用意はかねてととのえてあった。使は本多の邸へ引き取って常の衣服に着換(きが)えた上で、振舞いを受けることになっていたのである。城内から帰った本多

は、ちょうど着換えが済んで休息している呂祐吉に、宗をもってそれとなく問わせた。きょうお目見えをした者の中に大御所のお見知りになっている人はなかったかと問わせたのである。通事の取り次いだ返答は、いっこうに存ぜぬということであった。しかもそういった呂祐吉の顔は、いかにも思いがけぬ事を問われたらしく、どうも物を包み隠しているものとは見えなかった。

　饗応に相判などはなかった。膳部を引く頃に、大沢侍従、永井右近進、城織部の三人が、大御所のお使として出向いて来て、上の三人に具足三領、太刀三振、

白銀三百枚、次の三人金僉知らに刀三腰、白銀百五十枚、上官二十六人に白銀二百枚、中官以下に鳥目五百貫を引物として贈った。

本多の指図で、使の一行はその日のうちに立って、藤枝まで上った。京都紫野に着いたのが五月二十九日、大阪へ出たのが六月八日で、大阪で舟に乗り込んだのが六月十一日である。朝鮮征伐の時の俘虜の男女千三百四十余人も、江戸からの沙汰で、いっしょに舟に乗せて還された。

浜松の城ができて、当時三河守と名のった家康はそ

れにはいって、嫡子信康(ちゃくしのぶやす)を自分のこれまでいた岡崎(おかざき)の城に住まわせた。そこで信康は岡崎二郎三郎(じろうさぶろう)と名のることになった。この岡崎殿(どの)が十八歳(さい)ばかりの時、主人より年の二つほど若い小姓(こしょう)に佐橋甚五郎というものがあった。口に出して言いつけられぬうちに、何の用事でも果たすような、敏捷(びんしょう)な若者で、武芸は同じ年頃(としごろ)の同輩(どうはい)に、傍(そば)へ寄りつく者もないほどであった。それに遊芸が巧者で、ことに笛(ふえ)を上手(じょうず)に吹(ふ)いた。

ある時信康は物詣(ものもう)でに往った帰りに、城下のはずれを通った。ちょうど春の初めで、水のぬるみ初(そ)めた頃(ころ)である。とある広い沼(ぬま)のはるか向うに、鷺(さぎ)が一羽おり

ていた。銀色に光る水が一筋うねっている側の黒ずんだ土の上に、鷺は綿を一つまみ投げたように見えている。ふと小姓の一人が、あれが撃(う)てるだろうかと言い出したが、衆議は所詮(しょせん)打てぬということにきまった。甚五郎は最初黙(だま)って聞いていたが、皆(みな)が撃てぬと言い切ったあとで、独語(ひとりごと)のように「なに撃てぬにも限らぬ」とつぶやいた。それを蜂谷(はちや)という小姓(こしょう)が聞き咎(とが)めて、「おぬし一人がそう思うなら、撃ってみるがよい」と言った。「随分(ずいぶん)撃ってみてもよいが、何か賭(か)けるか」と甚五郎が言うと、蜂谷が「今ここに持っている物をなんでも賭きょう」と言った。「よし、そんなら撃(う)ってみ

る」と言って、甚五郎は信康の前に出て許しを請（こ）うた。

信康は興ある事と思って、足軽（あしがる）に持たせていた鉄砲（てっぽう）を取り寄せて甚五郎に渡（わた）した。

「あたるもあたらぬも運じゃ。はずれたら笑うまいぞ」甚五郎はこう言っておいて、少しもためらわずに撃ち放した。上下こぞって息をつめて見ていた鷺（さぎ）は、羽を広げて飛び立ちそうに見えたが、そのまま黒ずんだ土の上に、綿一つまみほどの白い形をして残った。

信康を始めとして、一同覚えず声をあげてほめた。田舟（たぶね）を借りて鷺を取りに行く足軽をあとに残して、一同は館（やかた）へ帰った。

翌日の朝思いがけぬ出来事が城内の人々を驚（おどろ）かした。それは小姓蜂谷が、体じゅうに疵（きず）もないのに死んでいて、甚五郎は行方（ゆくえ）がしれなくなったのである。小姓一人は鷺を撃ったあとで、お供をして帰る時、甚五郎が蜂谷に「約束の事はあとで談合するぞ」と言うのを聞いた。死んだ蜂谷の身のまわりを調べた役人は、かねて見知っている蜂谷の金熨斗（きんのし）付きの大小の代りに、甚五郎の物らしい大小の置いてあるのに気がついた。そのほかにはこの奇怪（きかい）な出来事を判断する種になりそうな事は格別ない。ただ小姓たちの言うのを聞けば、蜂谷は今度紛失した大小を平生由緒（へいぜいゆいしょ）のある品だと言っ

て、大切にしていたそうである。またその大小を甚五郎がふだんほめていたそうである。

甚五郎の行方は久しく知れずにて、とうとう蜂谷の一週忌も過ぎた。ある日甚五郎の従兄佐橋源太夫が浜松の館に出頭して嘆願した。それは遠くもない田舎に、甚五郎が隠れているのが知れたので、助命を願いに出たのである。源太夫はこういう話をした。甚五郎は鷺を撃つとき蜂谷と賭をした。蜂谷は身につけているものを何なりとも賭けようと言った。甚五郎は運よく鷺を撃ったので、ふだん望みをかけていた蜂谷の大小をもらおうと言った。それもただもらうのでは

ない。代りに自分の大小をやろうというのである。しかし蜂谷は、この金熨斗付き(きんのし)の大小は蜂谷家で由緒(ゆいしょ)のある品だからやらぬと言った。甚五郎はきかなんだ。「武士は誓言(せいごん)をしたからは、一命をもすてる。よしや由緒があろうとも、おぬしの身に着けている物の中で、わしが望むのは大小ばかりじゃや。ぜひくれい」と言った。「いや、そうはならぬ。命ならいかにも棄(す)ちょう。家の重宝は命にも換(か)えられぬ」と蜂谷は言った。「誓言を反古(ほご)にする犬侍(いぬざむらい)め」と甚五郎がののしると、蜂谷は怒って刀を抜(ぬ)こうとした。甚五郎は当身(あてみ)を食わせた。それきり蜂谷は息を吹(ふ)き返さなかった。平生何事

か言い出すとあとへ引かぬ甚五郎は、とうとう蜂谷の大小を取って、自分の大小を代りに残して立ち退いたというのである。源太夫は家康にこの話をして、何を言うにも年若の甚五郎であるから、上の思召しで助命していただければよし、もしかなわぬ事なら、人手にかけず打ち果たしてお詫びをしたいと言った。

家康はこれを聞いて、しばらく考えて言った。「そちが話を聞けば、甚五郎の申し分や所行も一応道理らしく聞こえるが、所詮は間違うておるぞよ。しかしそちも言うとおり、弱年の者じゃから、何かひとかどの奉公をいたしたら、それをしおに助命いたしてつか

わそう」
「はっ」と言って源太夫はしばらく畳に顔を押し当てていた。ややあって涙ぐんだ目をあげて家康を見て、「甚五郎めにいたさせまする御奉公は」と問うた。
「甚五郎は怜悧な若者で、武芸にも長けているそうな。手に合うなら、甘利を討たせい」こう言い放ったまま、家康は座を起った。

望月の夜である。甲斐の武田勝頼が甘利四郎三郎を城番に籠めた遠江国榛原郡小山の城で、月見の宴が催されている。大兵肥満の甘利は大盃を続けざま

に干して、若侍(わかざむらい)どもにさまざまの芸をさせている。

「三河の水の勢いも
小山が堰(せ)けばつい折れる。
凄(すさま)じいのは音ばかり」

こんな歌を歌って一座はどよめく。そのうち夜がふけたので、甘利は大勢に暇(いとま)をやって、あとには新参の若衆(わかしゅ)一人を留めておいた。

「ああ。騒(さわ)がしい奴(やつ)らであったぞ。月のおもしろさはこれからじゃ。また笛(ふえ)でも吹(ふ)いて聞かせい」こう言って、甘利は若衆の膝(ひざ)を枕(まくら)にして横になった。

若衆は笛を吹く。いつも不意に所望(しょもう)せられるので、

身を放さずに持っている笛である。夜はしだいにふけて行く。燃え下がった蠟燭の長く延びた心が、上の端は白くなり、その下は朱色になって、氷柱のように垂れた蠟が下にはうずたかく盛り上がっている。澄み切った月が、暗く濁った燭の火に打ち勝って、座敷はいちめんに青みがかった光りを浴びている。どこか近くで鳴く蟋蟀の声が、笛の音にまじって聞こえる。甘利は瞼が重くなった。

たちまち笛の音がとぎれた。「申し。お寒うはござりませぬか」笛を置いた若衆の左の手が、仰向けになっている甘利の左の胸を軽く押えた。ちょうど浅葱色の

袷に紋の染め抜いてある辺である。

甘利は夢現の境に、くつろいだ襟を直してくれるのだなと思った。それと同時に氷のように冷たい物が、たった今平手がさわったと思うところから、胸の底深く染み込んだ。何とも知れぬ温い物が逆に胸から咽へのぼった。甘利は気が遠くなった。

三河勢の手に余った甘利をたやすく討ち果たして、髻をしるしに切り取った甚五郎は、鼯鼠のように身軽に、小山城を脱けて出て、従兄源太夫が浜松の邸に帰った。家康は約束どおり甚五郎を召し出したが、目

見えの時一言も甘利の事を言わなんだ。蜂谷の一族は甚五郎の帰参を快くは思わぬが、大殿の思召しをかれこれ言うことはできなかった。

甘利は死んでも小山の城はまだ落ちずにいた。そのうち世間には種々の事があった。先に武田信玄が死んでから七年目に、上杉謙信が死んだ。三十六歳で右近衛権少将にせられた家康の一門はますます栄えて、嫡子二郎三郎信康が二十一歳になり、二男於義丸(秀康)が五歳になった時、世にいう築山殿事件が起こって、信康はむざんにも信長の嫌疑のために生害した。後に将軍職を承け継いだ三男長丸(秀忠)はちょ

うどこの年に生まれ、四男福松丸（忠吉）はその翌年に生まれた。それから中一年置いて、家康が多年目の上の瘤のように思った小山の城が落ちたが、それはもう勝頼の滅びる悲壮劇の序幕であった。

武田の滅びた天正十年ほど、徳川家の運命の秤が乱高下した年はあるまい。明智光秀が不意に起って信長を討ち取る。羽柴秀吉が毛利家と和睦して弔合戦に取って返す。旅中の家康は茶屋四郎次郎の金と本多平八郎の鑓との力をかりて、わずかに免れて岡崎へ帰った。さて軍勢を催促して鳴海まで出ると、秀吉の使が来て、光秀の死を告げた。

家康が武田の旧臣を身方に招き寄せている最中に、小田原(おだわら)の北条新九郎氏直(ほうじょうしんくろううじなお)が甲斐(かい)の一揆(いっき)をかたらって攻めて来た。家康は古府(こふ)まで出張って、八千足らずの勢(せい)をもって北条(ほうじょう)の五万の兵と対陣(たいじん)した。この時佐橋甚五郎は若武者仲間(わかむしゃなかま)の水野藤十郎勝成(みずのとうじゅうろうかつなり)といっしょに若御子(わかみこ)で働いて手を負った。年の暮(く)れに軍功のあった侍(さむらい)に加増があって、甚五郎もその数に漏(も)れなんだが、藤十郎と甚五郎との二人には賞美のことばがなかった。

天正十一年になって、遠からず小田原(おだわら)へ二女督姫君(とくひめぎみ)の輿入(こしい)れがあるために、浜松の館(やかた)の忙(いそ)がしい中で、大阪に遷(うつ)った羽柴家へ祝いの使が行くことになった。近

習の甚五郎がお居間の次で聞いていると、石川与七郎数正が御前に出て、大阪への使を承っている。

「誰か心の利いた若い者を連れてまいれ」と家康が言う。

「さようなら佐橋でも」と石川が言う。

やや久しい間家康の声が聞こえない。甚五郎はどうした事かと思っていると、やっと家康の声がする。「あれは手放しては使いとうない。この頃身方についた甲州方の者に聞けば、甘利はあれをわが子のように可哀がっておったげな。それにむごい奴が寝首を掻き

おった」

甚五郎はこのことばを聞いて、ふんと鼻から息をもらして軽くうなずいた。そしてつと座を起って退出したが、かねて同居していた源太夫の邸（やしき）へも立ち寄らずに、それきり行方（ゆくえ）が知れなくなった。源太夫が家内の者の話に、甚五郎はふだん小判百両を入れた胴巻（どうまき）を肌（はだ）に着けていたそうである。

天正十一年に浜松を立ち退（の）いた甚五郎が、はたして慶長十二年に朝鮮から喬僉知（きょうせんち）と名のって来たか。それともそう見えたのは家康の僻目（ひがめ）であったか。確かな事

は誰にもわからなんだ。佐橋家のものは人に問われても、いっこう知らぬと言い張った。しかし佐橋家で、根が人形のように育った人参(にんじん)の上品(じょうひん)を、非常に多く貯えていることが後に知れて、あれはどうして手に入れたものか、といぶかしがるものがあった。

この話は「続武家閑話(ぞくぶけかんわ)」に拠(よ)ったものである。佐橋家の家譜(かふ)等では、甚五郎ははやく永禄(えいろく)六年一向宗徒に与(くみ)して討死している。「甲子夜話(かっしやわ)」には、慶長(けいちょう)十二年の朝鮮の使にまじっていた徳川家の旧臣を、筧又蔵(かけいまたぞう)だとしてある。林春斎の「韓使来聘記(かんしらいへいき)」等に

は、家康に謁した上々官を金、朴の二人だけにしてある。もし佐橋甚五郎が事に就いて異説を知っている人があるなら、その出典と事蹟の大要とを書いて著者の許に投寄してもらいたい。大正二年三月記。

底本：「山椒大夫・高瀬舟・阿部一族」角川文庫、角川書店
１９６７（昭和42）年２月28日初版発行
１９９３（平成５）年７月10日52版発行
入力：蔦田佳子
校正：湯地光弘
１９９９年10月１日公開
２００６年５月15日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。